

西行と芭蕉に開かれる親鸞——日本人の宗教心——

宗教学者 山折哲雄

私は今年で京都にちょうど三十年住んでいることになるのですけれども、故郷は岩手県の花巻というところですし、しばらく前までは、「お前の故郷はどこだ。」と言われて「花巻だ。」と申しますと、「宮沢賢治（一八九六―一九三三）の生まれたところだな。」という反応がほとんどでございましたが、最近ちょっと異変が起こりまして、「花巻だ。」と申しますと、「大谷翔平（一九九四―）だな。」と言われるようになりました。もう宮沢賢治も大谷翔平さんの前では風前の灯火ともしびで、ちょっと危機感を抱いております。

今回、大谷大学の大谷学会から講演を頼まれました、これも大谷翔平とのおもしろい因縁と言いますか、妙な因縁の中で今日はここに参らせていただきました。

親鸞・西行・芭蕉の共通性

親鸞(一一七三～一二六二)と西行(一一一八～一一九〇)と芭蕉(一六四四～一六九四)という名前を出しました。この三者の間に非常におもしろい共通性があるということを昔から考えておりました、どういふ共通性かと言うとお叱りを受けるかもしれませんが、「美と信仰」といふ共通性です。「美」といふのは美意識の世界・芸術の世界、「信仰」といふのは宗教の世界の話です。さきの三人は、この「美と信仰」の二刀流なのです。あるいは「芸術と宗教」の二刀流、この点でこの三者は非常によく似ています。これは大谷翔平のものではないでしょうか。

そしてこの二刀流という考え方が、いろいろなキーワードの出し方によってそれぞれ違いますけれども、基本的に日本人の信仰心の原質をなしていると実は私は思っているのです。信仰一本やり、美意識一本やり、これは日本人の宗教心のベースではないだろうという感覚が前からありました。二刀流の大谷翔平さんと同じ名前の大学でお話をするのだから、これでいこうと思つた次第です。

存在の重さ・軽さ

私、三年前、八十五歳のときにちょっと大きな病気をいたしました。心房細動による不整脈がきつくなりまして、寒い日に外に出て帰ってきたとき、脳梗塞を起こして倒れたのです。主治医に相談いたしましたところ、八十五歳だがギリギリ手術に耐えられるだろうと思うから、手術したほうがいいだろうということで、思い切ってお任せすることにしました。カテーテル五本を静脈に通して心臓に近づけて、電子焼き鋏こてで患部を焼くのです。友人に「焼肉ジューだな。」と言われましたけれど、四時間ぐらいの手術でした。手術は成功して、二日で退院することができました。

それから丸々二年が経ちまして、薬はずっと飲み続けていますが、お陰さまで、今回も命拾いをさせていただきました。とても現代医学に足を向けて寝ることはできません。幾度助けられたかわかりません。

一ヶ月ぐらい静養しておりますと、いろいろな思いが浮かびあがってくるのですが、そのときに思ったことがこういうことでした。

私は若い頃からいろいろな病気をいたしまして入院を繰り返してきました。胃、十二指腸、それから胆嚢の全摘という手術をしております。消化器系の病気はほとんどしておりまして、急性肝炎・慢性肝炎・C型肝炎にもなりました。一時、膵臓癌の末期だと言われたことがありましたが、それは急性膵炎の誤診で、なんとか治って今日に至っています。その期間ずっと私が苦しめられたのは、鈍痛、激痛、疼痛、痒みという、重い重い痛みでした。病気というものはこういうものか、存在それ自体の重さみたいなものを全身に負わせられて苦しむ、これが病気かと思っていたのです。

でも、今回ばかりは違っていたのです。循環器系の病気です。もちろん循環器系の病には心筋梗塞のような激痛に苛まれるようなものがあることは知ってはいたのですけれども、私の場合にはぜんぜん痛みから解放されておりまして、ただ、なんと言いますか、呼吸が浅くなると言いますか、空気を身体からだに吸い込むのですが、その空気が非常に希薄で、呼吸のリズムがどんどん弱くなってスーッと気が遠くなるような瞬間があるのです。

病には「存在の重さ」を感じさせる病と、もう一つ、「存在の軽さ」を実感させる病気があるのだということを今度の病気で体験させられたのです。このままスーッとあの世に行けば、これこそ蠟燭の炎がスーッと細くなつて消えていく、あの「ニルヴァーナ」だ。お釈迦さまの言われる「涅槃」というのは、存在の軽さの究極の姿かもしれない。これは、今までの重い激痛、鈍痛に苦しんで、存在の重さの真ただ中でこの世を去っていく去り方とは違

うかもしれないと思うようになったのです。そして、これからそう長く生きるわけではないから、できればこの存在の軽さでいきたいというようなことをあれこれ考えているうちに、私はまた復帰することができました。

そのときに同時に考えていたことは、実に多くの重いものを背負ってここまで生きてきたなということです。その重いものにはたくさんあるのですけれども、存在の重さを象徴する最もわかりやすいものは何かと言うと、これは本です。おびただしい本を買い、貰い、読みもしないのに積み上げてきました。もちろん、私はいろいろなところに勤務しておりましたから、その都度図書館に寄付したり、古本屋さんに持って行ってもらったり、同僚や教え子たちに貰ってもらったりしております。国際日本文化研究センターを辞めるときは、日本語科をつくるという中国の大学にほとんどの本を寄付いたしました。本代よりはるかに送料のほうが高かったです。

最近では、あちらこちらで図書館の図書が放棄されているという話が出ております。しばらく前には、桑原武夫さん（一九〇四～一九八八）の蔵書が放棄されていたということが新聞に載っております。本というのは、もう社会での取り扱いに困るほど膨れあがっているようです。

私も三、四十年前から本はせつせと処分しています。全集という名のつくものほとんどを手放しました。いろいろな本を買い込んで、その一部を読んではきたけれども、どれほど自分の身についたか。ほとんどついていないようにも思いますが、その中の若干の部分は確かに血肉化けつにくかしています。それがないわけではない。

親鸞の重さ

特に親鸞聖人の思想という、信仰の世界ですね、これはもう中学生のころから染み込んでいます。けれども、染み込んだものが一体何なのかはよくわかりません。本を手元に置いていけば、それだけで本当に親鸞のものをいた

だいたと言えるのか、よくわかりません。だけど、その親鸞さんのお考え・お書きになったもので、私はこれまでおまんまを食べてきているわけです。これは裏切ることはできません。わかつてはわからなくても、これから読もうと読むまいと、それはそばに置いておかなければならないものだと思っただけですが、存在の重さということ考えた場合、思想・哲学・宗教書・文学書を含めて一番重いものが親鸞、あるいは親鸞の書物だったということにハッと気がついたので。

それで今回、私は、病気で休んでいるときに、手元に唯一残っていた『親鸞全集』を今度こそ手放そうと思いついて、二年前、年若い知人に譲りました。真筆の全集も併せて一切合切譲ってしまったのです。このときは身を切られるように辛かったのですけれども、不思議なもので、それを手放した瞬間、全身になんとも言えない解放感が満ちてきて、自分にとって親鸞さんというのは重い重い存在、存在の重さを最もきついかたちで象徴する存在だったということが、あらためてわかったのです。手放したその瞬間に得た解放感というのは、ちよつと大げさに言いますと、敗戦のときの「これで戦争が終わった！」という、あの解放感と非常によく似ていたのです。

手放したからと言って、親鸞さんのすべてが自分の身体から、頭から、心から消え去ったとは到底思えない、何が残っています。それで、やっぱり断捨離などはとてもできるはずがない、と思っただけです。それは何も親鸞さんだけではありませんが、親鸞という人間、その存在の重さというものが、これほどのものだったのかということをしたたかに教えられました。親鸞という存在の重さに、ハッと気がついたので。

西行の最期

私は『親鸞全集』を手放すことによって、無量の解放感、ある種の精神の自由、これを感じることができたので

す。もつとも思想にも存在の重さを象徴する思想があり、それに対して、思想から自由になった、信仰から解放された、哲学から身軽になった「軽み」の世界もあるに違いないと、漠然とそう思うようにはなってはいたのです。

そのような第一の象徴的な人物をここに挙げるとすれば誰か。それが私にとっては西行でした。十一世紀、平安時代の後期あるいは鎌倉時代の初期、その時代の変わり目に生きた、親鸞さんよりちょっと前に生きた西行。その年代差はせいぜい五、六十年でほとんど同時代者と言ってもよいと思います。

なぜ西行だったのかということですが、これも私の病気と関わりがあります。

私は先ほど、胃と十二指腸を切除したということを書きましたが、三十代の後半の東京時代に、切除したにもかかわらずまた胃潰瘍になって、吐血・下血をして四ヶ月の入院をいたしました。胃腸の病気で吐血をして担ぎ込まれますと、必ず一週間か十日間絶食状態に置かれるのです。一日、二日、三日と点滴だけで生きている。だんだん身体は枯れ木のような状態になる。ちょっと誇張して言えば死に近づいている。地獄のような空腹感・飢餓感が襲ってくるのです。ところが不思議なことに、四日目、五日目になると、その飢餓感がスーッと引いていったのです。「えっ？」と思いました。

人間の命というのは、ある欠乏状態になったときに、逆にリバイバルするエネルギーを噴出するのかもしれない。命の不思議さというものにハッと気がついたのです。五日目、六日目と絶食状態が続いていってもぜんぜん空腹感が襲ってこない。その当時本当にそこまで考えていたかどうかわかりませんが、観念のレベルでは「このまま命を終えてもいいや。」と思えるほど快適な心理状態でした。身体がスーッと軽くなったのです。食のコントロールによってこれだけ身体というものが軽くなるのか、身軽になるのか、そういうことを漠然と考えていました。そんなことを考えているうちに絶食期間が終わって復食に入りまして、また元の身体に返って退院できたのです。

中世の比叡山などで修行したお坊さん方のライフ・ヒストリーを記録した『往生伝』や『高僧伝』がかなり多く残されています。それを学生時代からよく読んでいたのですが、そのことが頭にふっと思い浮かんでいました。

比叡山で、三塔十六谷のいろいろなところに庵を結んで単独者として修行して、月に一度横川よかわに集まって念仏の結社を形成していた人々がいました。その人々の伝記を読んでおりますと、当時の山中修行者たちは、自分の寿命を悟ったときはほとんど例外なく絶食（彼らの言葉では断食）の生活に入っているのです。断食に入る前に精進行、五穀断ち・十穀断ちをして木の実・木の葉だけを食べて生をつないでいく。だいたい全体でひと月ぐらいの間に五穀断ち・十穀断ちの精進行を経て、断食行に入って、次に断水の一週間・十日間、そういう期間を経て眠るがごとくこの世を去っている。そのときに阿弥陀如来の幻覚が現れて、手を差し延べて死にゆく自分の頭の上をなでます。これを摩頂まちょうと言います。一種の靈験体験です。そういう記述が出てくるのです。

私は学生時代にその記録を読んで、頭の中だけでおもしろいと思っていたのですが、自分が実際に血を吐いて絶食療法に入り、痛烈な飢餓体験を経て、それがやがて消えていく、そのプロセスを思い出しながら、「これだ！」死ぬときはこれでいこう、断食死でいこうと、今でもそう思っているのです。そういうことを経験しているときに出会った人物が西行でした。

西行は高級官僚、貴族の出です。二十歳にして歌人として名を知られていたし、武道にも優れていました。係累は政治家・資産家で、いろいろな付き合いがある。その西行が若くして結婚をして、娘と息子が生まれて、にもかかわらず二十三歳のときに家出をしているのです。「出家」と一般には言われていますが、私は家出だと思えます。縋りついてくる娘を縁側から蹴落として、一人で家を出て行った。つまり自由の世界に躍り出て行って別の仕事をしましたのです。

勅撰の『新古今和歌集』にはいろいろな人の歌が選ばれておりますが、西行の歌が一番多く選ばれています。当時の第一の歌人と言われてもいます。私は万葉の柿本人麻呂(六六〇頃〜七二四)以来の歌人だと思っています。当時の歌壇の藤原俊成(一一一四〜一二〇四)や藤原定家(一一六二〜一二四二)や後鳥羽院(一一八〇〜一二三九)が最高の賛辞を彼に与えています。『新古今和歌集』に収められている西行の歌の主題の多くは桜の花と月です。それは共に、浄土と往生を象徴するかたちで歌われています。

その西行が比較的早いうちに遺言と言われる歌を作っています。皆さん、よくご存知だと思いますけれども、願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ

自分が死ぬときは春、桜の咲くころ、満月の夜、お月さんを眺めながら逝きたい、こういう歌です。この歌一首で、都の人たち、都の歌人たちの心をとらえたのでした。そして、その通りの季節、旧暦の二月十六日、夜、月を眺めながら桜の木の下で、この世を去っていったのでした。お釈迦さまの涅槃の日は二月十五日なので、一日違いです。これは私の妄想ですが、お釈迦さまの日に合わせてこの世を去ろうと思っていたけれど、それではあまりにも恐れ多いから一日ずらしたのではないのでしょうか。西行の死を聞いて、当時の専門歌人たち・都人たちは、賛嘆の声を上げました。定家も俊成も慈円(一一五五〜一二二五)も皆「西行はすごい！」と書き残しています。私もそう思ったのですけれども、どうも話がうますぎる、それが不思議だったのです。どうして、そうことがうまく運んだのかと…。そのときにふと思ったことは、西行はもしかすると断食死したのではないか、ということでした。

西行は旅から旅の生活を送りました。その中で食事をコントロールすることによって自分の心身の状態がどうなるかをきちんと図ることができた。それがまた、おそらくもう一つの重要な修行だったのです。亡くなる前の年、河内の弘川寺こうせんじに入って、その裏山に庵をつくって、桜の木の下に自分の入るべきお墓をつくったという伝承もあり

ます。西行は、本当は断食往生死だったのだ。この仮説は、この半世紀ずっと言ってきたことですが、一人、二人とこの仮説に賛同してくださる方が増えてきたようなところがあります。よし、私もこれでいく、そう思っていたのです。

「半僧半俗」

その西行の生き方の全体を見てみると、高野山で修行をしている。修行もしているけれども、実際は死体処理、橋の修理と社会事業的な仕事の手助けもしている。山から下りて旅から旅へ。吉野へ行って桜を愛で、そこでまた庵を結び、伊勢神宮へ行つて神官たちを相手に和歌の手ほどきをしている。ときには家出（出家）前に歌仲間だった、つまりかつて宮廷につとめていた京都の女房たちと付き合いを続けている。相当な歌のやり取りをしている。家出（出家）をしても歌との縁は絶対に切っていないのです。まさに美と信仰の二刀流です。そこに、なんとも言えない魅力があります。美と信仰の二刀流、その原点を示すような生き方、仕事をした人間、それが西行です。その点で彼はもう『新古今和歌集』の歌人の枠組みから飛び出していたのだと思います。

その西行の生き方が、親鸞の世界とつながっているということを言った人もいないわけではない。しかし、そのような考えは論壇・文壇の主流にはならなかったようです。が、私はなんとなくそれが本当ではなかったのか、と思つようになりました。

西行の生き方を一言で言えばどうなるか。美と信仰の二刀流、宗教と芸術の両刀遣い。半分僧侶で半分俗人であるということ、私は「半僧半俗」はんそうはんぞくと名づけることにしたのです。

奈良の都が平家によって焼かれたとき、再興するために重源（一一二二～一二〇六）という偉いプロデューサーが

西行のところによつてきて、「なんとかあなたの縁で、奥州の平泉の藤原秀衡（一一二二？～一一八七）のところでお金を集めてきてほしい。」と言ったので、西行は奥州まで行くわけです。途中、鎌倉に寄つて源頼朝（一二四七～一一九九）と武道・華道・芸道の話をしている。おもしろいです。坊主でありながら坊主の領域をはみ出すようなことを平気でやっている。そして最後の最後まで歌を手放さなかった。その後、『西行物語』のように、さまざまに西行を伝説化し、神話化していく物語が近世・近代まで続くわけです。それが学問の世界にまで入り込んでいるのです。

それほどの人気者・西行が成立する背景に、この二刀流の生き方というのは非常に大きい意味をもつ。日本人は二刀流がもとと好きだった。美の世界と信仰の世界を分けない。「あれかこれか」ではなく、「あれもこれも」です。ここが日本人の信仰心の一つのポイントだと私は思うようになりました。

法然と親鸞

そこで親鸞さんの登場ということになります。親鸞さんについてはもう多くを語りませんが、比叡山で修行を始めたときには憧れの法然（一一三三～一二二二）は山を下りていました。親鸞と法然との間には四十歳の年齢差があります。二十年の比叡山時代が過ぎて親鸞は山を下ります。そして、弾圧にあつて越後に流される。そのときの法然と親鸞の師弟の関係、これが神話化して今日まで伝えられています。私もその通りだと思つてきました。法然は、最も大事な自分の肖像画を親鸞に与えていますし、書物も与えています。たいへんな信頼です。親鸞は師・法然のおっしゃることなら地獄に落ちてもかまわないとまで言っています。この師弟の親密な関係性が、ご承知のようにずっと語り継がれてきたのです。

だけど私は、これはちよつと違うぞと思うところがあるのです。どこが違うのか。それは、法然が比叡山でも有名な立派な持戒僧（戒律を守る僧）であつたことです。当時の仏教界というのは、表では持戒、裏では破戒・無戒という僧侶のほうが多かつたのです。そういう中で、法然さんだけは持戒僧として名が高かつた。しかも、比叡山第一の智慧の法然坊と呼ばれ、知識・学識の上でも第一で、非の打ちどころがなかつたわけです。

ところが親鸞は、結婚をし、子どもをつくり、破戒僧の先端をいく僧として知られるようになります。それが念仏弾圧の原因の一つでもあつたのです。仲間の安楽（遵西、？～一二〇七）、住蓮（？～一二〇七）が首を切られていくほどです。親鸞も法然と共に遠流（おんる）の刑に処せられ、別れ別れになって流されていく。許されたあと、親鸞は京都に戻つてきません。戻つてくることができなかつたのです。妻と子どもを連れて常陸まで落ちて、破戒僧の先端を生きようとしていたのですから…。

すべての人間は念仏によつて救われるという点では、法然と親鸞の間に差はほとんどなかつたと思います。しかし、その暮らしの現場は天と地ほどの違いがあるのではないですか。絶対の信頼に基づく師弟の関係であることはもちろんその通りだと思ひますが、暮らしのリアルな場面では全く違う生き方を選んだのです。これは二律背反です。二人の師弟の関係というのは、典型的な二律背反の関係だと思ひます。

和讃

親鸞はやがて法然門下から消されていきます。その消されていく流浪の旅の生活の中で親鸞が出会つたのが、大衆の間で歌われていた今様歌謡です。後白河法皇が研究もし、編纂もしたと伝えられる『梁塵秘抄』という大衆歌謡であります。親鸞はおそらく越後の居多ヶヶ浜から善光寺辺りを通じて、山梨側に抜けたか群馬方面に行ったか、

いろいろな説があるようですが、山の中を通つて常陸まで落ちていきます。そのとき関所、関所で出会ったのがさまざまな職業の大衆・民衆です。人形を操りながら占いをし、神仏に祈り、春をひさぐ傀儡くわいばいと言つてもいいし、遊女あそびめと言つてもいい、そういう白拍子とも言われていた芸能者たちと出会う。そういう人々との交わりの中で旅を続けていつて、常陸に落ちつくわけです。そういう旅でのさまざまな出会いの中で、ときどきに書きはじめていたのが、和讃だったのでないでしょうか。仏を賛嘆する和讃。歌い、踊りながら、法悦の世界に遊ぶ法悦の和讃。和讃という表現形式の発見でした。

西行は万葉以来の歌人でありますから、五・七・五・七・七のリズムです。これに対して、和讃のリズムは七・五・七・五の四句の繰り返しから成っている。この旅での大衆との接触の中、今様歌謡という当時の流行歌の世界との出会いによって、親鸞は和讃、歌の世界に目を開かれていきました。もうそのとき、親鸞の頭に『教行信証』のあの難解な漢文調のリズムというものは、それほど残つていなかったのではないかと私は思うのです。残つていないというのが言いすぎならば、『教行信証』で展開した思想を歌のかたちに言い直し、書き換え、それを大衆と共に歌うことが大切だと思ふようになったのだらうと思ふのです。そういう変化です。

親鸞という人間を、思想家としても宗教家としても、そしてまた絶えず変化し、絶えず成熟する人間として捉えないと、この変化の意味はわからないと思います。『教行信証』というのは、万巻の典籍を読んで重要な問題を抜き書きしたり、集めたり、評価したりした資料集です。今日でいう若書きわかがの博士論文です。その博士論文を、その後の人生において、親鸞は読み解く、読み砕く。七五調の和讃文字の中に置き換える。つまり詩にして歌う…。このような世界を想像しないと、その後の成熟した親鸞の姿は見えてこないと思ふのです。

七十代、八十代に親鸞が作った和讃の真筆がたくさん残されております。私は、それを影印本でしか見ることが

できなかったのですが、なんと言うかエネルギーに満ちた、流れるような素晴らしい書、そして詩集です。『教行信証』の字の配りと、七十代、八十代の親鸞の和讃の字の勢いはまるで違う、と私は思っているのです。

「非僧非俗」

親鸞が、『教行信証』の世界から和讃の世界に抜け出ていくときに書きつけた言葉が「非僧非俗（僧に非ず、俗に非ず）」という言葉でした。すると、まさに私が言った西行の「半僧半俗」とどう関係するのか、という新しい問題が出てきます。

私は、親鸞が九十年の生涯の中で、最初から最後まで「非僧非俗」だったとは思わないのです。比叡山時代から次の時代への転換期に「半僧半俗」の生活をしていたかもしれない。「脱僧脱俗」のような、どちらでもない、それまでの自分の姿を強く否定するようなときもあったかもしれないと思います。

一言で言えば、西行のほうは「半僧半俗」と言いたくなるようなキャリアですが、親鸞が選ぼうとしていたのは、ときに否定の論理を強める「非僧非俗」というところまでいったということではないか。それはそれでいいのですけれども、しかし人間のなまの生き方というのはそんなものではなく、行ったり来たりです。進んだり退いたりです。心が「俗」へ傾いたり、聖なるもの、「僧」の世界へ傾いたり、行ったり来たりだと思っています。

タテ割り・ヨコ割り

その中で、九十歳近くになって親鸞が辿り着いたのが「自然法爾」という世界でした。これは五・七・五・七・七の和歌のリズムからも、七・五・七・五の和讃のリズムからも抜け出たような、解放されたような、そういう最

も素朴な語りの文体になっているのではないかと私は思っているのです。そのときに親鸞が辿り着いた考え方が「そのまま・ありのまま」です。それだけで、もう仏になつている、念仏だけで仏になつている、これが「自然法爾」という思想の究極の姿でしょう。それはもう『教行信証』の世界からは遥かに離れて、余計なものを捨てて軽くなつた、まさに重い重い荷物を全部振り捨ててしまったあとの、身軽さの境涯そのものだと思います。そういう点では、親鸞という存在も歌を離れては、その信仰の深まりと共に成熟しなかつたと思います。そのプロセスの中で、和讃という詩歌のかたちが非常に大きな意味を果たしていたということです。

この点で、西行と親鸞の間には寸分の違いもない。それならこれまで、なぜそういう議論が起こらなかつたのか。それは外から持ちこまれた学問という名の枠組みがあつたからです。

平安時代・鎌倉時代・江戸時代という、時代区分というヨコ割りの枠組みが、彼らの共通の心の世界・精神のあり方を寸断してしまつていたわけです。そんな時代区分ぐらいのことで、あの時代の第一線で生き、活躍していた人間の心の内容を、そもそも解釈することなどできるわけがないのです。

もう一つが、文学史・哲学史・宗教史・仏教史などという分野別、タテ割りの考え方です。宗教史の中で親鸞・道元(一一〇〇～一一五三)・日蓮(一一二二～一二八二)の名前は出てきても、西行の名前は出てこないのです。文学史の中で『万葉集』の歌人たちや紫式部(九七〇?～一〇一九?)等々の名前が出て、そして西行に至る。しかし、その文学史の中に親鸞・道元の名前は出てこないのです。

分野別にタテ割りにし、時代をヨコに輪切りにして論ずる。その中では単細胞の専門家を養成することはできません、そのことによつて、最も重要な思想の、大いなる流れというものを見ることも、明らかにすることもできません。むしろそれを妨げてきたのです。もちろん先に言った二刀流という問題の重大性みたいなものも見出すことが

できなかったわけです。

芭蕉と『莊子』

そして最後に芭蕉です。これは難しい。芭蕉というのは複雑な男で、私もよくわからないのです。だけど、一つだけはつきり言えることは、芭蕉もまた西行や親鸞と全く同じことを言おうとしていたということです。

芭蕉に接近する方法はいろいろあるだろうと思います。私は『野ざらし紀行』を選びました。これは『奥の細道』と並ぶ芭蕉の代表的なエッセイだと思っと思っていますけれども、旅から旅への生活をして、最後は生き倒れて髑髏むくわうになっても構わないという覚悟を歌った、その覚悟を示した詩文集です。初めのところこういう言葉が出てくるのです。「僧に似て塵あり、俗に似て髪なし」。僧ではあるけれども煩惱（塵）があると自分のことを言っているわけです。では、お前は俗人かと言われると、「俗人に似てはいるけれども、剃髪ぐらいはしているよ。」とっています。

「僧に似て塵あり、俗に似て髪なし」。この文章に出会ったとき私は、「非僧非俗」を思い出しました。親鸞の愚禿の姿を思い出しました。芭蕉は親鸞を知っていたのか、全く同じことを言っているのではないかと思いました。ところが、不思議なことに大量の芭蕉の文献の中に親鸞の名前は一度も出てこないのです。親鸞と芭蕉の間には約四〇〇年の時代差があります。これは謎なのですから、知っていて名を挙げなかったのか、本当に知らなかったのか、これはわからない。

芭蕉研究者は本当にたくさんおいでになります。その論文全部に目を通すことは私にはもちろんできませんけれども、芭蕉は中国の古典からさまざまなものを引用しています。ある人の説によると、芭蕉と芭蕉の入門は、あの時代に『莊子』（ちゆうし）に関心をもち、その研究をしていたそうです。老莊思想に対する重視ですね。老莊的な虚無・カオ

ス、あの世界です。一度、日常世界をカオスの世界に落とし込んで、そこから新しい言葉を発見する、カオス願望というのが非常に強かったような気がします。

それともう一つ、芭蕉には乞食願望がありました。自分は菰被こもかぶりであるという自覚をうたった俳句も作っています。旅をしているときに乞食僧こつじきそうに間違われたことが何度かあり、それを非常に喜んでいのです。乞食願望はあるけれども、本当に乞食の僧になったかと言うと、そこまでは、いつていない。だから、願望なのであります。歌を作る、美の信徒として、俳諧の世界に遊ぶ、と同時に中途半端かもしれないけれども僧への憧れもある。僧は僧でも乞食僧の僧だ、というところがおもしろい。

ある芭蕉研究家が、老荘の世界のある詩人の詩句の中に、「僧に似て塵あり、俗に似て髪なし」という言葉があるということ突き止めている。だから普通の文献学的比較研究からすれば、「この芭蕉の言葉は中国からの影響だよ。」と言うこともできる。そういう声が芭蕉研究の背後にはあったから、これをただちに親鸞に結びつける人がいなかったのかもしれない。しかし、よく考えると、それはあまりにも親鸞の発想によく似ているとも言えます。

日本人の信仰心

芭蕉が『奥の細道』で辿った道、そこは具体的には親鸞が行ったり来たりしていた北陸路でもありました。ほとんど同じルートを歩いている。芭蕉はそのとき、その地域が浄土真宗にとっても重要な土地であったことを本当に知らなかったのでしょうか。親鸞がかつてその地で、旅の生活の中で苦労していたということを知らなかったとはちょっと考えにくいことです。

これ以上はなんとも言えないのですが、しかしその上で私は、芭蕉が親鸞のことを知ろうが知るまいが、

彼もまた親鸞と同じように美と信仰の二本道を歩いていった、日本人のベーシックな信仰心のルートの上を歩いていった、そういう人間だったと解釈すればいいことだろうと思うようになったのです。

「非僧非俗」も、「半僧半俗」も、それから今申しあげた「僧に似て塵あり」という芭蕉の考え方・生き方も、すべては日本人の信仰心の根つこのところに流れている重要な考え方・感じ方・生き方、その発現であると思うようになったのです。

そういう世界を知るためには、あるいはそういう世界に近づくためには、時代区分というヨコ割り、分野別というタテ割り、こういう学問の立場からは自由にならなければならぬ、自由にならなければわからない、そう考えるようになったのです。そこから自由にならなければ、西行というキャラクター、親鸞という人生、芭蕉という存在、これらがバラバラに、その専門領域に局限され、そこでのみ議論される存在になってしまうからです。これは我々自身の信仰心の宝を、その可能性を結局はつぶすことにつながるのではないのでしょうか。

認知症と「自然法爾」

もう一つ、最近私の目の前に立ちあらわれてきたのが、この高齢社会の国民的状況の中の認知症という問題であります。私は今年八十八歳で、あと二年経てば親鸞さんの九十歳までいくのです。

今、人生一〇〇年時代と言われています。一〇〇年時代を謳歌するメディアが増えましたけれども、実はたいへんです。一〇〇年時代の高齢者の晩年をどうするか、晩年をどう生きて死ぬか。前天皇も退位される前は、「天皇の終焉」ということを言っていました。

その高齢社会の終末期の最重要問題が、認知症の問題と深く関わるようになっていっているではありませんか。私も

いつそれになるかわからない。今日も、もう少しいろいろな人の名前を出しながら思っていたのですが、もう出てこなくなっているのです。会場で「教えてください。」などと言うと、スマホで教えてくださる学生さんがおいでになります。

数年前から認知症の専門家のご本なんかを拝読しており、長谷川和夫さん（一九二九～）の『やさしく学ぶ認知症のケア』（永井書店、二〇〇八年）を読んでおりましたら、認知症の治療のパイオニアとして知られる長谷川さんが、認知症になった方を介護するときの最重要な心得は何かという問いを出されていました。それは「ありのままに引き受けること」だそうです。そのまま・ありのまま、これが認知症の社会における介護者・関係者の重要な心掛けであるということをおられて、このときに親鸞の「自然法爾」の言葉を思い出したのです。

ありのまま・そのまま、念仏で、仏になつている。それは姿かたちがなく、そのままの姿で仏。考えてみると、これほど困難なことはありません。計らいを捨てて、ありのままである、ということほど、実は難しいことはないのです。これは易行ではないだろうと私は思っています。もしかすると、わかりませんが、難行・苦行の果てにしか手に入らないものかもしれない。

西行のやつたように、断食往生しようといつ決断するか。でも、認知症になれば、いつするかもわからなくなつて、機を逸する。自己決定なんていうことが、それほど簡単にできるものではないということが、だんだんわかるようになってきたわけです。だから、私にとって、今日の主題と絡めて言えば、西行で死ぬか、親鸞で生きるか、ということになっているのであります。

ちようどお時間になったようですので、これで私の話は終わらせていただきます。

〈キーワード〉美、二刀流、ありのまま